

## あなたは本当に救われようとしていますか

「どうせ私をだますなら、だまし続けて欲しかった」「どうせ私をだますなら死ぬまでだまして欲しかった」

これは昔流行った「女心の唄」と、西田佐知子さんという人の歌った「東京ブルース」という歌謡曲の歌詞の一部です。まあ、こうした詩は流行歌には使い古されたフレーズと言えるものですが、しかし、裏を返せば、かくのごとくに一般社会でめずらしくなく生じていることなのでしょう。

しかし、どれほどありふれているからといっても、現実には、いわゆるこうした「裏切り」という行為は、人に耐え難いほどの経験をもたらすということを物語っているのでしょう。確かに、「信じていた」ことが、「偽り」であったということが分かったときの人の内に生じる、混乱、不安、憤りなどはいかばかりかと思えます。

「不都合な真実」を冷静に受け止められる人は、ほとんどいないだろうと思えます。

それが、さほど重要な事柄でなかったとしても、少なからぬショックはあるでしょう。

ましてや、人生を懸けてきたもの、と言えるものの場合、物事を証明する「事実」よりも、自分が信じてきたものにしがみつこうとする思いはよく分かるような気がします。

さて、人情的には、そうした思いはよく理解できますが、クリスチャンとしての資質という観点から捕らえた場合、必ずしも、そうとばかりは言っていられないようです。

というのは、例えば、次の聖句を考えてみてください。

(テサロニケ第二 2:9 - 12)「不法の者が存在するのはサタンの働きによるのであり、それはあらゆる強力な業と偽りのしるしと異兆を伴い、また、滅びゆく者たちに対するあらゆる不義の欺きを伴っています。彼らがこうして滅びゆくのは、真理への愛を受け入れず、救われようとしなかったことに対する応報としてなのです。そのゆえに神は、誤りの働きを彼らのもとに至らせて、彼らが偽りを信じるようにするのであり、それは、彼らすべてが、真理を信じないで不義を喜びとしたことに対して裁きを受けるためです。」

最初の人間アダムとエバの時から、サタンは人々を欺いてきました。

さて、もちろん欺いたものと欺かれたものとは、当然欺く者が悪者であることに間違いはないのですが、「欺かれた」方の者には何も責任がない、という考え方を聖書は容認してはいません。

上のテサロニケの聖句にある「神は、誤りの働きを彼らのもとに至らせて、彼らが偽りを信じるようにする」というのは、神が意図的、積極的にそうするという意味ではないでしょう。「神のご意志はあらゆる人が救われて真理の正確な知識に至ること」だからです。では、どういう意味かと言うと、各人に真理を知り、確かめる手だてが必ず与えられるということが保証された上で、何らかの事情で、その人が、それを意図的に退けてしまうことが現にあり得るということを示唆しているものと言えらると思います。

そして、その保証の最も基本的なものが聖書です。それまで自分が神のご意志、聖書の真理

だと堅く信じてきたものであったとしても、実際に聖書と食い違っていることが明らかになったとき、さてどういう態度を取るかということが問題なのです。

そうした事柄に現実には直面しない内は、「そんなの、聖書に書いてあることを受け入れるに決まっている」と[言う]のは簡単なのですが、現実にはそう簡単にはいかないようです。

新たに提出された「事実」あるいは、「現状の間違い」というものは、検証してみなければ、果たして、そうなのか、全くのでたらめなのか分かりようがありません。

ふつう人の反応は「なるほど、じゃ調べてみよう」とはまずしません。

「あり得ない」「ばかげている」「こんな怪しい話を聞くつもりなど毛頭ない」etc.

その他おおよそこうした表現、感覚しか出てこないというのが現実です。

それこそがサタンの思うツボであり、「捕らわれた」状態に留まり続けることになります。

しかし、よく考えてみれば、これまで、様々な事柄を調べ、吟味し、検証した上で、ある事柄を信頼に足ることとして受け入れてきたはずですが、ではそうした吟味はいつ止めてしまうべきだったのでしょうか。

神はそうした態度をどの時点で完全に止めてしまうべきと望んでおられるのでしょうか。

クリスチャンとしてのどの段階に来たときにそれは、あつてはならない態度だと思われるのでしょうか。

提出された「新事実」というものは、検証してみるどころか、見たり聞いたりすることすら、ふさわしいことではないという認識は、クリスチャンとしてのどの時点で身につけるべきものなのでしょうか？

(テサロニケ第一 5:21)「…すべてのことを確かめなさい…」という助言は、いつどの時点で無視するのがふさわしい態度なのでしょうか？

「すべてのこと」とは書かれていても、その中でも数多くの例外があり、とりわけ、今自分が信じていること、教えられてきたことと食い違っていると思える聖書の言葉は決して自分で確かめてみたりすべきではないというのが「知恵の道」であるとどこに示されているのでしょうか。

(エフェソス 5:10)「…何が主に受け入れられるのかを絶えず確かめなさい。」という言葉はいつ「自分で確かめるのではなく、信頼のある正式に神から任命されたとされる人に確かめてもらいなさい」という意味に変わるべきなのでしょうか？

いずれにせよ、「今更、この期に及んで一体わたしにどうしろと・・・」「何がどうであれ、今となつてはとにかく、これまでどうり生きてゆく以外にない」ということで、何が真理なのかを確かめてみることを止めてしまった人は神から見て「救われようとしなかった」人と見なされてしまうことだけは真実なのです。

やはりクリスチャンたる者、常に真理の探究者であり続けなければ、本物のクリスチャンにはなり得ないということでしょう。